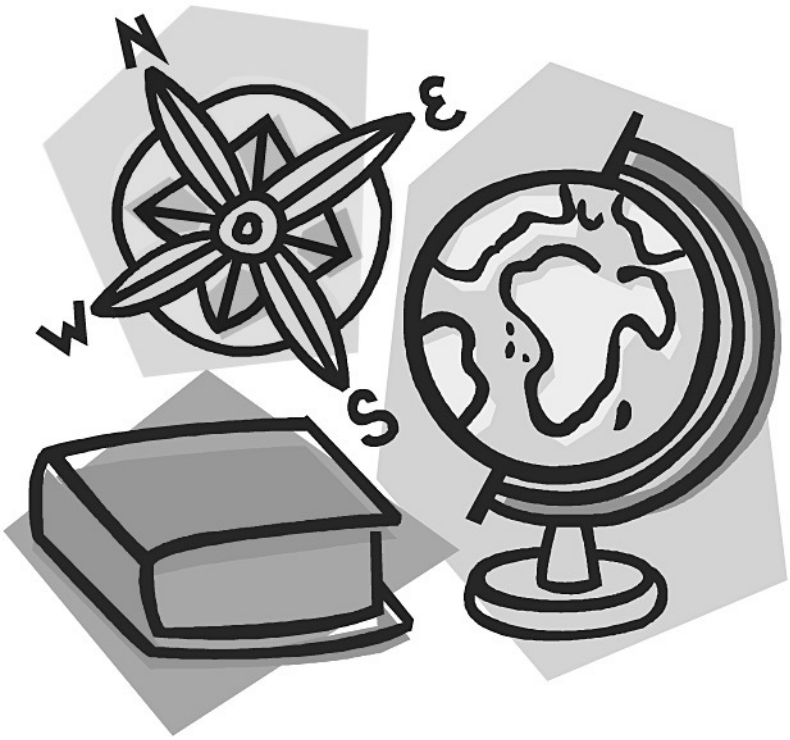
資　料　編



・ボランティアセンターあり方検討の共有ミーティング記録　・・・資P.1
・市町域でのボランタリー活動推進方策検討委員会　ワーキング論点整理　・・・資P.13
・市町ボランティアセンターでの取り組みの現状に関する調査結果（抜粋）　・・・資P.36
・市町域でのボランタリー活動推進方策検討委員会　設置要綱　・・・資P.39
・市町域でのボランタリー活動推進方策検討委員会　検討経過　・・・資P.40
・市町域でのボランタリー活動推進方策検討委員会　委員名簿　・・・資P.41

平成１７年２月８日　社協ボランティアセンターあり方検討の共有ミーティング

ミニパネルディスカッション

「社協ボランティアセンターのあり方検討について」
～今こそ共有したい社協ボランティアセンターの使命と役割～

パネリスト:**北淡町社会福祉協議会　地域福祉活動専門員　凪　保憲　氏**
村岡町社会福祉協議会　ボランティアコーディネーター　岡田　奈智子　氏

ファシリテーター
関西国際大学　助教授　成田　直志　氏（市町域でのボランタリー活動推進方策検討委員会委員長）

第１部では、ボランタリーな活動の領域の拡がりと、社協ボランティアセンターの社会化・市民化を提起

関西国際大学　成田氏

成田：関西国際大学の成田です。みなさんとは、中間まとめの段階で、ふりかえりと問題提起をさせていただきました。今日は、いよいよ第２部、社協ボランティアセンターのあり方について、素案と骨格に関するご説明をし、ご意見を聞き取りながら、第２部の完成を最終的に目指す、そのようなプロセスに入ります。

第１部でいいたかったのは、みなさま方が担当しているボランタリーな活動の領域は、狭い意味での福祉の領域から、福祉、保健、医療等関係する領域に分野が広がっていますが、その分野の広がりの中で、私たちはどうコーディネートするのか、ボランティアセンターの運営の中にどのように取り込んでいくのか、というのが一つ目の問題提起でした。

そしてもう一つは、社協のボランティアセンター発展の経緯を見ると、社協が行う事業を支えてくれるボランティアの養成、社協組織内のボランティアから始まってきましたが、地域には、もっともっと多様なボランティアのスタイルができています。場合によっては、社協に拠り所をもたないボランティアグループが活発に活動しています。そういうグループに対して、私たちはどのような支援の方策をとることができるのでしょうか。いわゆる社協のボランティアセンター自体が社会化する、市民化してくる、そのプロセスを、どのように理解して、仕事に活かしていくのか、そのような２つの問題提起をして、みなさんからご意見をいただきました。

会場の様子

第２部は、社協のボランティアセンターにこだわり、あり方を考える

成田：この第２部は、一般的な状況、情勢を踏まえて、社協のボランティアセンターにこだわって、社協のボランティアセンターの独自性とは何か、その独自の使命、価値とは何か。そこにこだわりをもちながら、われわれ社協のための、ボランティアセンターのあり方を考えよう、それが、第２部の構成です。

今日、当初は私から３０分間話をすることにな

っていたのですが、この会場に、策定委員のメンバーが２名いることもあり、ミニパネルディスカッション風にこの場を運営したいと思います。

地域福祉推進計画指針（ささまち４）とあり方検討との関係

成田：また、この会場には、今私たちがみんなで取り組んでいる地域福祉推進計画指針である「ささえあうまちづくり推進プラン４（ささまち４）」の策定委員である岩城さん、藤原さんがおられます。

実は、このボランティアセンターのあり方議論というのは、ささまち４、私たちの発展計画とも密接に関係する意味合いを持っています。「立体的にこの３０分間を構成しよう」、それが、私のねらいで、お２人にも発言いただきたいと思っています。予定にないことをお願いし、申し訳ありません。

本論に入る前に、２つ３つのことに触れておきたいと思います。

ひとつは、「ささまち４」の策定のプロセスとの関係で、私たちのあり方検討の素案がどのようなポジションを占めているのかを明らかにしていくことです。

ささまち４のキーワードは「当事者」、「小地域」、「地域福祉の経営」

成田：「ささまち４」でこだわっているのが、「当事者にこだわる」、「小地域にこだわる」こと、そして、「社協の経営」から、「当該地域の地域福祉の経営そのものにこだわっていく」こと、そのためには、社協の組織を変えなければいけない、経営改革の問題が協議の焦点になっています。

この問題と、社協のボランティアセンターとどのように関係しているのか、という論点、これは、岩城さんにあとでコメントいただきます。

合併の問題～大きくしながら、小さくするために～

成田：もうひとつは、合併の問題です。非常に大きな問題です。合併は「大きくしながら、小さくする」ということですよね。

「大きくする」ということは、たとえば４町合併の場合だと、４つの旧町が持っていた切り札を、同じテーブルの上に出してみる。そして、４町がそれぞれ１つずつ持っていたカードを１つのテーブルに出せば、４つの切り札をみんなが共有することができる。これは、「大きくする」ことのメリットです。

ただし、「大きくする」ことによって、薄くなってしまってはいけない。住民の不安がここにあるのです。じゃあ、旧町のボランティアセンターのあり方、住民の不安を解消するために、どのような方策、手立てが必要なのか。それは、「小地域」にこだわっていくこと、つまり、「小さくしていくこと」だと思うのです。

これも同じく「ささまち４」の策定委員である藤原さん、合併の当事者でもあるのですが、コメントいただきたいと思います。

ボランティアコーディネーターは、地域の福祉に直結する大切な仕事

成田：もう一つの視点を申し上げたいと思います。
私は、みなさんのお仕事を、同じ地域福祉に関わる者として、非常にうらやましく思っています。それは、みなさんの考えていること、やろうとしていること、やったこと、それがそのまま地域の福祉につながっている、ということです。

こんな恵まれた仕事はない。大変だけれども、

とても大切な仕事です。みなさんの「想い」や「願い」、「意欲」、「本気」などが、全部、地域の福祉に直接的につながる、大事なお仕事をしている立場にあるという自覚を強く持っていただきたいのです。

そんなみなさんの前で、３０分という短い時間ですが、お話ができる機会が与えられていることに、私も大きな喜びを感じています。なぜならば、みなさんを通じて、地域がよくなるからです。

３つのことを話しました。まず、一つ目のことについて、岩城さん、「ささまち４」のビジョン委員会で議論したこととの関係で、ボランティアセンターのあり方に期待すること、議論に期待すること、手短にコメントしてください。

社協ボランティアセンターの「戻れる場所」ができた

岩城：一宮町社協の岩城です。

（津）一宮町社協岩城氏

大きいですけれど、まず一つは、現状で「ボランティアセンター自体が何なのか」がわからない、ということが、問題としてあると思います。つまり、社協自体が、社協ボランティアセンターをどのように位置付けたら良いのか、それがない状況の中で、「社協のボラセンが」といっても何もならない、と思います。「どう説明するのか」といわれても、戻れる場所がまずない。「社協のボランティアセンターはこういうものだ」と、いえる、説明できるものがないというのが、現状だと思います。

それは、すなわち組織として、住民に対して、しっかりしたこともいえない、また、どんどん、きついことをいうと、「サラリーマン化」していく、専門機関でなくなっていくようなイメージがありました。

この計画書を見て、すばらしいな、と思ったのですが、「これで、戻れる場所ができた」のではないか、と思いました。

地域福祉を推進する人材をどう育てていくか

成田：藤原さん、ささまち４との関係で、合併の当事者でもあるお立場から、一言コメントをお願いします。

藤原：今ありました、合併の中で、一つは社協がどこにいくのかという点について、ささまちで議論している中では、沢山大事にしていきたい、と思う点があります。そのことと、ボランティアセンターとの関連でいうと、やはり、地域福祉を推進する人材をどう育てていくのか、ということがあると思います。

黒田庄町社協　藤原氏

これまでは、ボランティアを養成することで、地域福祉人材を養成してきた、ということがあるのかと思いますが、これからは、もう少し違ってくるのか、と思います。

今回の冊子の中で、「福祉」の概念の整理をされていた部分があったかと思います。その中で、細かく整理をされていると思うんですが、これまでの福祉人材というものとは少し違う、例えば、地域の当事者を支えていったり、まちづくりを進めていく人たちをどう育てていくか。

その中で、ささまちとの関連でいくと、ボランティアセンターが対象としている層と、ささまちで対象とする層に、若干違いがあるというか。よりボランティアセンターでは、NPO であるとか、活動者に対しての支援も考えておられるように思いました。

ささまちは、もう少し「関心の層を広くしてい

こう」という部分や、「当事者を中心に自主的に活動していこう」という人たちをどう増やしていくかが焦点になっています。これが「その人たちの地域での生活をどう支えていくか」という意味での権利擁護にもつながっていくと思います。その辺がここで合ってくるといいかなと思います。

コーディネーターの仕事の組織化と、専門員との連携の課題

藤原：合併後については、これまでボランティアコーディネーターが、経験と勘と度胸で進めていっていたようなところがあるとしたら、それをもう少し組織的にどうするか、また専門員とどうからんでやっていくのか、という部分まで、進められたらいいかなと思います。

社協のミッション（使命・役割）と、社協ボランティアセンター独自のミッション（使命・役割）

成田：お二人、さすがですね。
　岩城さんにご発題いただいた内容は、今日お配りした冊子の中身にもでています。

　問題は、社協のミッションを明らかにしています。社協ボランティアセンターのミッションは基本的に社協のミッションと同じものをベースにしているわけですが、社協ボランティアセンターのミッションの独自性は何ですか、という点です。

　独自性が明らかにならなければ、専門員の仕事も、ボランティアコーディネーターの仕事も一緒になってしまいます。専門職の仕事というのは、「独自の対象と方法をもっているかどうかの違いである」と考えると、もちろん社協のミッションは、私たち共通の価値として持ちますが、「ボランティアセンターのミッションの独自性とはなんだろう」、こだわりをもって今日問題提起し、明らかにしていきたい。これがひとつのポイントです。

ボランティアは、企画、実施、評価、発見の全プロセスに関わる中で、地域福祉人材になる

成田：そして、藤原さんにご提起いただいたことが、まさに、地域福祉人材のことです。

　それは、ボランティアというのは、プラン(plan：企画する)、ドゥ（do：実施する)、シー（see：評価する）のプロセス中の、単にドゥ（実施）の機能だけを担うのではなく、藤原さん自身の持論でもありますが、「企画にも参画する、チェックや評価にも参加する」こと。つまり、企画(plan)、実施（do)、評価(see、check)、発見（discover）の全プロセスに関わることによって、ボランタリーな活動に関わるその人は地域福祉人材になりうる。

　こう考えるならば、わたしたちの考える地域福祉人材、ボランティアセンターが進める地域福祉人材づくりというのは、どういうことなんだろう。この点については、報告書素案の３８ページ以降に書いてあります。この報告書のポイントとするところを、ピンポイントで語っていただいたことになりました。うれしく思います。

社協ボランティアセンターの独自性に徹底してこだわる

成田：さてここで、２人の策定委員に、問題をふってみたいと思います。

　第２部は、徹底して「社協ボランティアセンター」にこだわる、「社協ボランティアセンターの独自性」にこだわる。地域には沢山の中間支援組織があるが、なぜ社協にこだわるのか。

　そこで、とことんこだわってきた凪さんに、そのこだわりをどのように素案まで作り上げてきたのか、コメントいただきたいと思います。

凪：こんにちは、北淡町社協の凪です。

北淡町社協　凪氏

第１部で、「ボランタリーな活動とは」という基本的な部分のまとめは、みなさん既に見られているかと思います。第 2 部では、なぜ社協のボランティアセンターに、僕らがこだわろうと思ったか。

「どれだけ、地域に向けて開かれたボランティアセンターとして機能するか」が大切

凪：今、成田先生が言われたように、いろいろな中間支援組織が地域の中にありますよね。NPO にしても、ボランティアセンターという看板をあげていなくても、近い活動をしている団体が沢山ある。その中で、僕らが古いだけで「うちの町のボランティアセンターは社協です」と言い続けるのは、現在の情勢から判断するとちょっと違うような気がしています。

そこで、どれだけ地域に向けた、開かれたボランティアセンターとして機能するか、というところが、大事ではないかと思っています。そこをきちっとやっていなかったら、他の中間支援組織との関係が非常に微妙になってくるのではないか。社協が「ボランティアセンター」という看板を揚げて、地域の中で、地域福祉活動を推進していくために、どんなことをしていかなければいけないのか、もう一度、この計画の中で考えてみようというのが、この第２部の報告書の内容です。

住民の力を高め、地域福祉を広く展開するため、いろいろな支援のしかけをどうつくるか

凪：僕自身は、今回福祉活動専門員の立場でプラザのあり方検討に関わらせていただいています。しかし、僕自身も、専門員とコーディネーターの役割の違いをどこまで見出すのか、という点については、あまり分かっていません。その整理は、あとで岡田さんにお答えいただきたいと思います。

ただ、社会福祉協議会という組織において、「地域の住民の力を高める」ということと、「地域福祉活動を普く、広く展開していく」というところでいうと、いろいろな形の支援の仕方がなかったらあかんわけですよね。そのしかけをどうつくっていくんや、という話が、第２部づくりの議論で活発にでました。

社協にどうボランティアセンターを位置づけるのか

凪：最終的には、ボランティアセンターも社協である、という話がでました。そこで、ボランティアセンターをどう位置付けるか。

私たち、地域のコーディネーターが、あるいはワーカーにとって、この報告書が、社協のボランティアセンターをどう形づくっていくために、私たちが読んで、咀嚼することで、どこの地域でも同じように社協のボランティアセンターとしての活動を高めていけるだろうと。それについて、素案の３８ページから書かれているような内容、つまり、社協ボランティアセンターの使命や役割、ミッション、特性に書かれているような内容が出てきています。

社協ボランティアセンターの大きな役割は、「地域福祉を進める資源を生み出す機能」

凪：第 2 部素案がでてくるまでに、いろいろな議論の中で、それぞれのワークグループごとに、いろいろな意見の出し方をされていますが、基本的に、社協のボランティアセンターというのは、「地域福祉を進める社会資源を生み出す機能」が、非常に大きな使命・役割である、という話になってきています。

さっき藤原さん、岩城さんがいっておられたように、「経験と勘と度胸に頼っていた社協活動」を改めて科学的に分析する作業を、委員会を通じて僕らはやってきたつもりです。

いみじくも、成田先生もおっしゃっていたように、岩城さん、藤原さんの話が３８ページから４０ページにかけて書かれている内容とおっしゃっていましたが、ささまちの方で協議していた内容と、僕らがあり方検討で議論していた内容は、基本的な部分でリンクしていたんだなあと。

僕は、そのような関連性は意識せずに、本来の社協ボランティアセンターのあるべき像を追求して、自分の思いを中心にして話をしていたのですが、ささまちの２人の委員の話を聞いて、基本的にはずれていなかったことがここで確認されたことは意味深いものと感じています。

改めて指針に基づき、全県的に、社協のボランティアセンターを再構築する

凪：私たちは、そういう想いで、社協のボランティアセンターの特徴を活かし他の中間支援組織とは違う何かを全県的につくっていかなければいけないと思うんですよね。既に合併の波が県内にも押し寄せ、合併に伴う行政補助金についても微妙な議論がされています。

そんな中で、改めて、この指針に基づいて、もう一度、ボランティアコーディネーターが社協の中でどう動くのか、地域の中でどう動いていくのか、地域住民と一緒に共有しながら進めていかないと、社協ボランティアセンター不要論にも発展しかねません。

県の「参画と協働」という立場からは、「どうも社協のボランティアセンターだけがボランティアセンターではない」的な論調が聞こえてきます。ここでもう一度、社協のボランティアセンターが地域全体を活動エリアとしたボランティアセンターなのだ、ということをみせておかないと、大変なことになるなあ、という感じもうけています。以上です。

「誰のために、何をするのか」を明らかにする

成田：凪さんもふれていただいたように、素案第２部の３７ページ以降に、そのことが書かれています。

まず、私たちの共通のミッション(使命)として、37 ページで社協そのものが持っているミッションを明らかにしようとしています。そして、なぜ社協ボランティアセンターとして何にこだわって、ミッションを明らかにしなければいけないのか。そのことが、３８、３９ページに書かれています。このことはすごく大事だと思うんですね。

では、社協のミッションと同じでありながら、社協ボランティアセンターは何にこだわって、何を独自の方策にして、ミッションに迫るのでしょうか。

私たちは、ボランティアセンターのコーディネーターとして、地域の住民に、私たちの職場と仕事を語る、「ミッション・ステイトメント」をしっかりと持ちえているのだろうか。「誰のために、何をする」ときっちり語れる内容をもっているのだろうか。そんなことを改めて確認し合いたいと思います。独自の対象と独自の方法があって、コミュニティワーカーとしてのコーディネーターの私たちの専門性が成立する、ということであれば、それを明らかにしなければいけないと思うのです。

社協内で「根元でつながっているかどうか」が使命・強みに通じていく

成田：改めて、社協ボランティアセンターの使命って何、独自性って何、こうきかれたときに、私

たち一人ひとりが語れるものをもっているのだろうか。そんなことを岡田さんに聞いてみたいと思います。

村岡町社協　岡田氏

岡田:「社協の中のボランティアセンターの使命ってなんだろうな」というと、社協以外のボランティアセンターと比べてみて、どうかな？と思ったときに、兵庫県の場合、幸いコーディネーターが一人必須で設置されていますけれども、社協という器の中で、コーディネーターが一人なんですよね。

その人の役割が全体に波及しているかどうか、というと、できているというところばかりではないのでは、と思います。

かたや、NPO などでは、同じ想いをもった人たちが集まっています。どこが違うか、というと、さっき藤原さんがおっしゃっていたかと思いますが、根元でつながっているかどうかによって、社協の中のボランティアセンターでありコーディネーターであるということが、使命・強みに通じるのではないかと思います。

「生活課題に気づく目」と、「地域に拡げていこうとする視点」の大切さ

私自身も、ボランティアセンターということばだけが一人歩きしているときには、「何かしなければいけない」という思いばっかりで、例えば、「講座をしなければいけない、教室をしなければいけない」ということが、コーディネーターの役割であり、センターの仕事だと思っていました。

けれども、それだけではなくて、さっき成田先生がおっしゃったように、「それは何のためにしているのか」というと、「地域のこの人」など、それぞれが持っている社協ワーカーの一人である視点がある。生活課題に気付く目があって、それを地域全体に広げていこうとする視点がある。それを持っているのが、社協のボランティアセンターではないか。そこに大きな使命があるのではないかなと思います。

成田：ありがとうございます。そうなんですね、それを、みなさんとともに考えようというのが、今日の共有ミーティングの目的なのです。みなさん一人ひとりが、自分の言葉で、自分の仕事、職場を語る、それを計画化、組織化して、共通の目指すものを確認しようと思うのです。

「改革力」とは、内発的で能動的な私たち一人ひとりの働きかけが前提

成田：第２部のタイトルは、「ボランタリー活動支援拠点としての社協ボランティアセンターのあり方」、サブタイトルに、「社協ボランティアセンターの改革力の形成に向けて」とあります。ひとつのポイントは、「社協にこだわる」ということですよね。

そして、もうひとつのポイントは、「改革力」という言葉。こんな言葉をあえて使っていることに意味があります。

「改革力」というのは、「内発的で、能動的な、私たち一人ひとりのはたらきかけ」が前提になるんですよ、ということです。「改革する力」とは何か。改革を担う人は誰か。局長が改革するのではない、専門員が改革するのではない。直接実務を担っている私たち自身が、内発的な問題意識、力で、能動的にボランティアセンターを変えていく、その改革力になり得るのかどうか、ということですね。

そのために、私たちは今、何に気づかなければいけない、何を感じなければいけない、何を見なければいけない、何を考えなければいけない、何

をしなければいけないのか、どのことが大切なのだろうと思います。

第２部の構成の中に、とても大切なキーワードが入っています。それは、「気づく力」、「気づけば、変わることができる」ことです。「気づき」の要素は、これまでも沢山でてきています。若干哲学的になるかもしれませんが、第２部の中に流れる思想のようなものを、凪さんに語ってもらおうと思います。「気づくって何？」、「それによって変わるって何？」

「内側から揺り動かされ、突き動かされる何か」を社協職員が持つこと

凪：成田先生がおっしゃった「内発的で、能動的であること」というのは、まさに、今、僕らに求められていることだと思うんですね。

「内発的な」という言葉は、「内側から揺り動かされるような、突き動かされるような何か」があるじゃないですか。仕事をしていても、社協という組織に身をおいていても、コーディネーターであっても、専門員であっても、ヘルパーであっても、もちろん局長や役員であっても、「何かしないと、このままではいられない」ということです。

それが、ボランティアコーディネーターの立場でいうと、さっき岡田さんがおっしゃったような講座という形をとっていったり、グループ化を進めることになっていくのだと思います。

気づきによって、「内発的な思いによって突き動かされる人たち」を地域の中につくっていく

凪：しかし、「僕らが突き動かされているそのもの」を僕らだけが感じているだけでいいのか、という点に、僕の問題意識があります。

僕には、ある方から教えていただいた言葉がずっと残っています。それは「人は学ぶことによって気づく、気づくことで変わる」という言葉で、これによって僕は自分の中のこれまでの感覚ががらっと変わりました。

この委員会でも、僕はよく「気づきなんや、学びなんや、変わることなんや！」ということをよく言っていたんですが、「気付ける要素」というものは、地域の中に沢山あるんですよね。地域の人との何気ない会話だったり、当事者との何気ない会話だったり、その中に、気づきの要素は必ずありますよね。

その気づきの要素を何らかの形で社会化していくことが、社協活動でもありますよね。社協ボランティアセンターとしての役割でもありますよね。そのことを、私たちが、どう感じるのか、それが、この計画の中でも大切な部分を占めているのでは、と思っています。

気づきによって、地域活動として、ボランティアセンターとして「あ、何かせなあかん」と感じたときに、それを自分だけでやるのではなくて、そこに、同じように内発的な思いによって突き動かされる人たち、というのを、地域の中につくっていく作業、それが、ボランティアセンターとしての大きな役割である、ということが、報告書のなかにまとめられていますが、まさにそうだと思います。

役割を担う中で、ボランティアセンターのあり方も変化していく

凪：ボランティアセンターが、地域の中で、人材養成を進める、そして、当事者や支援が必要な人へのコーディネートを行っていく、ということが、今まさに求められていることです。このことをしないのであれば、ボランティアセンターの看板を揚げる必要はないわけですよね。そのことに、僕

らは気づかなければいけないし、地域の中に沢山種をまいていく、思いを地域の中でつくっていくことが、とても大切なことだと思っています。

そういうことをやっていけば、ボランティアセンター自身の機能が大きく変化していけるのではないかと思います。

これまでのような、という言い方をすると、語弊があるかもしれませんが、例えば、「〇〇講座をやりましょう」など事業を行うことはもちろん大切なのですが、それだけではなく、個人、地域の住民、その講座に参加する人たちが、主体的に、問題にかかわれるような仕掛けづくりが必要なのでは、と思うんです。

４０ページに「気づきは変わることの出発点」とありますが、手話に関心がある人がいて、では手話講座やりましょう、というのだけではあかんわけですね。手話講座を通じて、聴力に障害がある人たちの生活全体を知ってもらえるような、そのことに対して気づきを提供できるような学習機会を、僕らはつくっていかなくてはいけない。それでこそ、社協活動だと思っています。そんなことを今回、非常に細かく論じてきています。素案が完成物になったあかつきには、コラムも沢山はいり、読み物としても充実したものになっていくと思います。

もう一度、「主体的な気づきを地域に広めていく」ということにこだわったボランティアセンターの運営を、この報告書の中では伝えたいと思っています。

社協ボランティアセンターの「強み」と「弱み」

成田：ありがとうございます。先ほど岡田さんのご発言の中で、「他の中間支援組織に比べてどうなんだろうか」という点、社協ボランティアセンターの特性や優位性とは何なのだろうか、そのことを知っておくことは必要ですよね。

社協ボランティアセンターの強みってなんですか、弱みってなんですか。強みを、どうすればより強めることができますか、弱みがあるとすれば、どうすれば克服することができますか。

この報告書の中では４３ページで、社協ボランティアセンターの強みと弱みを改めて明らかにしようとしています。

岡田さんはその点、先ほどの「違いを意識する」ことを含め、どのようにお考えですか？

組織内に同じ思いを持って動く人がいるか

岡田：私は、自分自身が置かれている立場のことでないと、なかなかわからないのですが、社協の中で一緒に仕事をしていても、ボランティアセンターの職員って所長とコーディネーターしかいないですよね。社協が何か事業をするときにはみんなが手伝ってくれるのに、ボランティアセンターが何か事業をしようとするときには、いつもコーディネーターしか動いていない、ということが多いんではないでしょうか。そういう点は、大きな弱みだと思います。

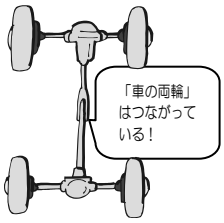
凪さんがおっしゃったように、地域に種をまいて、人を育てていくところの、土壌もつくっていかなければいけないし、まく種ももっているわけだけれども、それを育てていこうとするのが、コーディネーターひとりしかいない、というのは、非常に弱みだと思います。ひとつはそれです。

社協の両輪、専門員とコーディネーターは、「つながってはじめて車を動かせる」

岡田：社協でないボランティアセンターを持っているところというのは、同じような思いを持った方が沢山いらっしゃって、自分たちがしようとし

ていることに関しては、沢山力があると思うんです。非常に強いと思います。それは他の強みです。

しかし、昔からよく言われますよね、社協の両輪が「専門員」と「コーディネーター」ということだったのですが、その両輪をイメージするときに、「タイヤの部分」だけをイメージする方が多かったのではないでしょうか。しかし、その２つはかならずつながっていなければいけないんですよね。そして、それにより動くのは、車全体であるということです。



自分の組織の中にこそ、しっかり発信していく

岡田：そう考えると、弱みを強みに変えていくためには、発信していく先が地域だけではなくて、自分の組織の中にもしっかり発信し、自分の思いをわかってくれる職員を、少なくとも一人は組織の中につくる。そこで力をつけて発信していく。

それから、うちの場合はトップが非常に理解があるので、ボランティアセンターのことはまかせてくれるし、応援もしてくれ、フォローもしてくれますが、市町によってはそういうところばかりではないかもしれません。そういう時に、向かっていける力を中でもつけていかないと、弱みのままで終わってしまう。そうすると、ボランティアセンターが「なくてもいいもの」に変わっていってしまいます。

今からの時代、決してそうではなく、絶対無くてはならないものだと思いますので、組織の中に向かって発信していくことが大切だと思います。

社協の他職員との協働をデザインする

成田：ありがとうございます。車の話、とてもわかりやすかったですね。車の両輪、タイヤの部分だけではないよ、と。ボランティアセンターにとってのタイヤの部分は何、エンジン部分は何、運転する人は誰、車体は？どんな色を塗るの？

こういう基本的な設計・デザインをして、動かすのは、みなさんの仕事です。しかも、その車をうごかすには、道路や交通信号など環境が整備されていなくてはいけないですよね。いい車をつくっても走れなかったら意味がないわけだから、専門員のみなさんと協働して、目的地にきちんとつくようにしなければいけません。

つまり、まちそのものをつくりあげる、社協の他のスタッフとの協働が必要だと、そのようにみなさんに考えてほしいんです。

３つのエンパワメント
～当事者、住民・市民、地域のエンパワメント～

成田：わたしたちは、ボランティアセンターという車をどうつくっていくか、そのために考えなければいけない視点を、この報告書の中では３つ出しています。「３つのエンパワメント」です。

当事者のエンパワメント、住民・市民のエンパワメント、そして地域自体のエンパワメントです。このことは４０ページに書かれています。

それは、地域福祉を進める人づくりと、具体的な組織づくり、装置づくり、資源づくりにつながります。まだ、議論は十分ではないかもしれませんが、大切なポイントだと思います。

エンパワメントというのは、「あきらめ、どうしようもない、課題は手の届かないところにある」と感じるのではなく、「課題を、もう一度手の届くところに引き寄せてみよう」と、自分が能動的に働きかけることによって、その課題を解決しよう、

というアプローチの仕方です。

当事者は、「サービスを与えられる対象」ではなく、「当事者自身の主体的な生きる力を再構築しよう」というのが、エンパワメントアプローチです。報告書内でも説明しています。

「過程目標」（プロセスゴール）と「関係性目標」（リレーションシップゴール）を重視する

成田：「当事者にこだわる、小地域にこだわる」のが私たちの考え方です。

「当事者の課題を解決する力」と報告書の中に書いてありますが、この「問題解決」自体は現実的な「課題目標」です。この課題目標を達成するために、「過程目標」と「関係性目標」の２つの目標を設定します。そして、当事者の問題を解決するために、地域の中で関係性を高めながら、そのプロセスづくり自体を目標にして、過程を通じてもたらされる経験の蓄積や、力量の形成を目的にします。そして、もう一度はじめに戻ります。

この過程は円状に循環します。この循環するプロセスの中で、地域そのものがエンパワメントされます。ボランティアセンターのコーディネーターとは、このプロセスそのものをマネジメントする、経営する人なのです。

関係性を高めていく、そのプロセス自体が３つのエンパワメント、地域の福祉力形成へつながる

成田：問題解決だけではありません。問題解決する、マッチングする、ボランティアを探す、講座を開く、どれも大切なことですが、この課題目標を達成するために、みなさん意識して、関係する人たちとの関係性を高めていく、そのプロセス自体が、地域の福祉力を高めていくことにもつながっていく。「気づき」ながら、お仕事をしていくわけですね。それを、繰り返し、繰り返し、地域の中で展開していくことが、「当事者のエンパワメント」、「住民・市民のエンパワメント」、「地域そのもののエンパワメント」、結果として、「自治力を高めること」や「福祉コミュニティの形成」あるいは「創造すること」につながる、と。そういうことを、この素案ではいっているんですね。

つまり、過程（プロセス）や、関係性そのものに注目しましょう、ということです。これは、運動的な意味合いでの、ボランティアコーディネーターの仕事です。「運動的な」、という意味は、マッチングだけの、対面・個別的な援助だけではなく、面としての地域社会に目を向けたコーディネーターの役割ってあるのですよね、それが「運動的」という意味合いです。それを意識して仕事をしよう、ということです。ちょっとふみこんでいますが、この報告書の命の部分でもあります。

具体的な提言の作成に向けて

成田：では、これを受け、私たちは、３つのゴールを達成するために、どのように組織を見直さなくてはいけないか、あるいは支援方策は、連携・協働のあり方は、と具体的に議論してきました。

ひょっとすると、問題は社協そのものの中にあるのかもしれないし、地域社会の意識の成熟度に問題があるのかもしれません。凪さんの言われた「気づき」の問題です。具体的に要素を決めて、謎を解いていこう、これが、今日の素案の中にまだ含まれていない、これからの議論のポイントです。

そこのことによって私たちは、社協のボランティアセンターの独自性、優位性、これまでも、これからも、社協ボランティアセンターは、地域にとってなくてはならない存在でありつづけます、持続的に発展するんです、継続的に成長するんです、それは、単体の経営個体という意味ではなく、住民のためになることなんです、という議論をし

ているんですね。

　乱暴な投げかけをしてしまっていますが、私たちの委員会では、今日のみなさんの議論を受けて、最終的な報告書に活かしていく。「みんなで創りあげよう」ということですね。みんなで創りあげて、共通の財産にしていこう。但し、みんなが共通のスタートラインに立っているわけではないから、この報告書では、事例・コラムを多用します。「課題はたくさんあるが、私たちは、このことを大事にして、私たちのボランティアセンターを強化していく」、こう考え、実践していくことのできる報告書にするつもりです。精力的な議論をお願いします。